

僕と茶臼の可愛い彼

九年 石垣颯真

僕は猫が好きだ。丸くコロコロとした目、ふわふわとした手触り、愛らしい声など猫には人を魅了するありとあらゆる要素が詰まっている。

そんな僕は猫を飼っている。茶臼で元野良の四歳のオス猫である。彼は愛想がいいとは言い難いが、とても可愛らしい猫だ。

もとはエプロンのポケットに入っても空間を余してしまうほど小さく、下を向いて歩かなければ踏んでしまいそうというほどであった。当時の大きさは大体スマートフォンほどの大きさだった。

だが彼はそこからどんどん大きく育っていった。なんせ来た初日からちゅーる四本を平らげたのだ。大食いになるだろうと思っただけだったが、案の定一日に五回ほどの食事をするグルメ猫になった。ただ、頻繁に外出する為なんとか標準的な体形を保っている。今の大きさは大体座布団一枚分ほどにまで大きくなり、重さは大体辞書二冊分ほどになったと思う。

だが、そこが何とも愛おしく、一家そろって魅了されている要因でもある。

そんな彼が我が家にやってきたのは忘れもしない二〇二〇年六月十二日金曜日、午後九時十分程で

あった。当時僕は小学六年生であった。

当時僕は習い事をしており、その日も習い事からの帰りで父の車に乗って帰っている途中であった。その日はとある映画が地上波放送されるということで、胸躍らせながら帰宅していた。その帰り道に彼と会った。田舎のこぢんまりとした十字路にただ一匹ぽつんと立っていた。それをのちに父と母が保護をするために連れ帰ってきたのが始まりだった。

彼は一切物怖じせず、えさに食いついてきた。

その日から生活の中心にはいつも彼がいた。一家そろって愛情をこめて世話をした。たまにほかの猫と喧嘩をして帰ってくることもあったが大きな怪我もせず、今まで健康だ。

そんな彼もいつしか人の言葉を覚え、

「いはいん」

と言うようになった。その日は驚きを隠せなかった。今までにやあと愛らしい声で鳴いていたのに人の言葉を尚愛らしい声で言うのだ。そんな彼に魅了されない方がおかしいだろう。我が家は彼への愛が更に高まった。

彼は今も我が家の癒しとなっている。気まぐれににやあと鳴いたり、こちらに来てはなでさせてもらえたり、お腹を吸わせてもらえたりする。僕は彼が大好きだ。鬱陶しく思われているかもしれないが、彼に対する最大限の愛を向け続けていきたい。そしていつか、彼の命が尽きてしまうその時まで、一生一緒に居たいと心底思う。